

ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp

獣医の

カルテ



56



伊勢 哲生

(射水市戸破)

いせ動物病院院長

ペットショップなどで子犬や子猫を購入する時、種類や生年月日、ワクチン接種歴のほか、「遺伝子検査済み」という記載も見かけます。

動物の遺伝子検査は、いろいろな用途で行われています。犬猫では病気の危険因子があるかないかを調べており、鳥類では雌雄を鑑別しています。

犬の場合、特定の疾病に関して将来起こり得る可能性を持つ遺伝子の変異があるかないかを調べていきます。

子犬の時に採血をして専門の機関で遺伝子検査を行い、変異した遺伝子があるかどうかを調べます。犬の種類によって遺伝子変異部位がそれぞれ違ってくるため、

遺伝子検査

依頼をする時にはその機関で調べたい犬種の検査があるかどうかをも確認する必要があります。

犬の遺伝病としては例えば、進行性網膜萎縮症という眼球の網膜が小さくなっていく病気があります。この病気にかかりやすい犬は、アイリッシュセッター、コリー、ミニチュアシュナウザー、秋田犬、ゴールデンレトリバー、ラブラドルレトリバー、ミニチュアダックス

クスフンド、トイプードル、チワワなどです。

その他にも、ウェルシュコーギー、ラブラドルレトリバーなどでみられる変性性脊椎症、ジャックラッセルテリアでみられる遺伝性消化管腫瘍など、いくつかの遺伝性疾患の危険因子の有無を調べることが出来ます。

猫でも同様にペルシャ、アメリカンショートヘア、スコティッシュ

ユフォールドでみられる多発性嚢胞腎やメインクーン、ラグドールでみられる遺伝性肥大型心筋症の危険因子も検査で分かります。

遺伝子の疾患は他にもあります。ジャーマンシェパード、ビーグルなどにみられるてんかん発作、秋田犬、ミニチュアシュナウザー、ウエステイ、マルチーズなどでみられる遺伝性難聴、プードル、ウェルシュコーギー、ミニ

病気の危険因子調べる



PCR法で雌雄鑑別を行なっているベンガルワシミミズク(雌)

チュアシュナウザーなどにみられる白内障などです。

遺伝子検査はあくまで、かかりやすい疾患の因子を持っているかどうかを調べる検査です。因子を持つてないから病気にかからないというわけではありません。今後、病気と遺伝子の関係性が少しずつ明らかになっていけば、今以上に検査できる項目が増えるでしょう。